

資 料

第18回アジア競技大会（インドネシア・ジャカルタ）視察報告

——男子マラソン・女子長距離種目に着目して——

尾 方 剛*

1. は じ め に

本年8月23日から8月31日までインドネシア・ジャカルタで開催された第18回アジア競技大会の視察に赴いた。8月16日から22日まで広島経済大学陸上競技部長距離ブロックの合宿を北海道士別市で行い、23日に広島空港から羽田空港へ向かう際に予約していた便が台風で欠航となり羽田空港へ行けるかどうか心配したが、別会社の便で移動できた。羽田空港から深夜便で移動し24日の早朝に無事スカルノ・ハッタ国際空港（Bandar Udara International Soekarno-Hatta）へ到着した。

ホテルへ荷物を置き、現地時間の9時頃（日本との時差は-2時間）Jakarta Convention Centerへ移動し、各国のメディアが放送しているブースを見ながらTBSのブースへ到着した。アナウンサー、ディレクターの方々と打ち合わせ後、Gelora Bung Karno Sports Complex（GBK）内の陸上競技が行われるゲロラ・ブン・カルノ・スタジアムへ解説者、アナウンサーの方々と移動した（写真1）。この競技場は6万人を収容できる楕円形の形をしたスタジアムで、グラウンド内では短距離陣が東京五輪でも正式種目となる混成リレー（男女混合）のバトンパス練習を行っていた。コーチに話を聞いたところ、男子と女子ではそもそも走力が違うので受け渡しが難しいからバトンを合わせる作業をしていると言われていた。

GBK内には陸上、競泳、バドミントン、柔道、空手、レスリング、ソフトボール、野球、バレーボール、バスケットボール、アーチェリー、ホッケー、フェンシングなど様々な競技が行われていたため観戦や取材するのに適したコンパクトな運営方法であった。その日の夕方、競泳の試合を初めて観戦し、池江璃花子が50メートル自由形決勝にて大会新記録で優勝し、今大会6冠を達成した瞬間を間近で観てとても感動することができた（写真2）。この日で競泳は終わり、次の日（25日）から陸上競技が始まった。



写真1 陸上競技が行われたゲロラ・ブン・カルノ・スタジアム



写真2 アジア大会2018が行われた競泳会場

* 広島経済大学経済学部准教授

2. 男子マラソン

25日の6時から男子マラソンが行われるため、3時半に起床し、選手がウォーミングアップを行うサブトラックへ4時半頃に到着して井上大仁(MHPS)、園田隼(黒崎播磨)両選手とコーチへ話を聞き、選手が走っている姿を見学して解説するための情報を集めていた。5時過ぎにはメイン競技場へ移動し、競技場内で6時から解説を行った。暑さは早朝曇っていたのでさほど暑さは感じられず、日本の暑さに比べれば苦ではなかった。

(スタート時の気温26度、湿度82%)

レースはスタジアムをスタート・ゴールとし、片道約10kmを2往復するコースで行われた。レース序盤から中盤にかけては想定通りスローペースで推移し、10km通過は33分46秒、中間点を1時間10分32秒と女子並みのタイムで通過した。25km過ぎて園田がペースを上げたがそれほどペースアップではなく、前に出たせいでペースメーカーのような形になってしまった。仕掛け所としたら25km、35km過ぎのちょっとしたアップダウンを利用するしかないと考えていたが、ELABBASSI Elhassan (Bahrain) が37km付近でペースアップし、井上と2人に絞られマッチレースとなった。ELABBASSIは序盤から余裕がなくアップアップの状態であつたが、スローペースや園田の他選手が走りやすい適度なペースでの引っ張り、急激なスピードチェンジができない井上のおかげで息を吹き返しスタジアムでのラスト100m勝負となった。ラスト50m付近でELABBASSIがインコースから強引に接触覚悟で井上を抜きにかかったが、井上は冷静に対処し男子マラソンでは日本勢32年ぶりの金メダルを獲得した。園田は積極的な走りをしていて勝負所で離れてしまい4位となった(表1)。

参加選手最速の2時間6分54秒(日本歴代4位)を持つ井上が35km以降で仕掛け危なくなく勝つことを予想していたが、2時間10分57秒の実績しかないELABBASSIに最後まで粘られた。ELABBASSIは前回の仁川大会10,000mで金メダルを獲得したスピードランナーなので、トラック勝負に持ち込まれたら井上にとって分が悪いと踏んでいた。最終的には競い勝ち、事なきを得た場面であった。

今後井上に求めるのは30km以降の勝負所で相手を完全に諦めさせるようなスパートができるかどうかだ。世界大会だと序盤からの揺さぶりが何度もあり、ある程度疲労した中でのスピードチェンジができないとメダル獲得は厳しくなるので、その点を課題として克服できるようトレーニング等に取り組んでほしい。園田に関しては初の国際大会ということで経験のなさを露呈した結果となった。これからこういう国際大会の経験を積んで、まずは自分でレースを組み立て、レースを支配することができるようになれば持ち前の粘る走りが生きてくる。

表1 アジア大会2018 男子マラソン結果

1.	2:18:22	井上 大仁 INOUE Hiroto [Japan]
2.	2:18:22	ELABBASSI Elhassan [Bahrain]
3.	2:18:48	DUO Bujie [China]
4.	2:19:04	園田 隼 SONODA Hayato [Japan]

その日の18時20分から男子マラソンの表彰式があつたためその様子も解説した。国旗掲揚の機材が競泳の時に使用されていたものと酷似していたため、せっかくのセレモニーが多少残念な感情があつたり、国ごとでの違いなのだと思え入れざるを得ない状況を考えると複雑な気分であつた。

3. 女子10,000m

25日の20時から多少蒸し暑さが感じられる気

象条件でのレースとなった。日本代表として堀優花（パナソニック）のみが出場し、前半から積極的にレースを引っ張っていたがペースメーカーの様な形となってしまう、中盤、集団の揺さぶりで一旦集団から離されてしまった。しかし、そこから集団のペースが落ちたため、堀は追いつきその勢いで先頭に立って前半と同じように引っ張ってしまった。終盤のペースアップには集団についていける余力はなく、自己ベストよりも40秒以上悪い32分42秒37で7位となった（表2）。

日本選手権のように積極的な走りでも集団を分散させよう、自分の走り方でレースをするという意図は見られたが、集団を離せないと相手が楽に走れてしまい戦略的に不利になるため後ろに下がって様子を伺いながら走るなど工夫が必要だと考える。まだ若い選手なので国際大会の戦い方を学び、より多くの経験や実績を残すことが今後の成長に繋がっていくことだろう。

表2 アジア大会2018 女子 10,000 m 結果

1.	32:07.23	MASLOVA Daria [Kyrgyzstan]
2.	32:11.12	CHUMBA Eunice [Bahrain]
3.	32:12.78	PB ZHANG Deshun [China]
4.	32:18.32	SB MOHAMMED Alia [United Arab Emirates]
5.	32:30.24	HABTEGEBREL Shitaye [Bahrain]
6.	32:42.08	LOGANATHAN Suriya [India]
7.	32:42.73	堀 優花 HORI Yuka [Japan]

PB…自己最高記録

SB…今季自己最高記録

4. 女子 5,000 m

28日の19時50分からレースということで17時頃ウォーミングアップエリアへ行き、コーチに話を伺ってから放送席がある競技場へ移動した。女子 10,000 m に比べると気候は幾分涼しく感じられた。今季絶好調の鍋島莉奈（日本郵政グ

ループ）は5月のゴールデングランプリ 3,000 m で日本歴代4位の8分51秒72、アメリカの大会で5,000 m 日本歴代9位となる15分10秒91をマークした。日本選手権で連覇を達成した勢いで必ずメダルを獲得すると期待していた。

レースは割と速い展開で推移し、1,700 m 付近で先頭集団がペースアップした際、鍋島は何も抵抗することなく簡単に集団から離れてしまった。山ノ内みなみ（京セラ）は反応できていたが、それ以降ジワジワと先頭から遅れていった。鍋島は終盤追い上げたが4位、中盤まで先頭集団に食らいついた山ノ内は6位に終わり、メダル獲得とはならなかった（表3）。

鍋島は状態が良かったただけにもう少し上手いレースができていればメダルに絡めていた。山ノ内は、直前練習を見ていたが初の国際大会がプレッシャーとなり、自分の走りが全くできていなかった。その心理状態から多少は勝負できる状態には戻したがこのような国際大会での経験を数多く積むことが有効ではないかと考える。とはいってもまだまだ2人はこれから飛躍していく選手なので今後の活躍に期待したい。

表3 アジア大会2018 女子 5,000 m 結果

1.	15:08.08	BEFKADU Kalkidan [Bahrain]
2.	15:30.57	MASLOVA Daria [Kyrgyzstan]
3.	15:36.78	REBITU Bontu [Bahrain]
4.	15:40.37	鍋島 莉奈 NABESHIMA Rina [Japan]
5.	15:49.30	LOGANATHAN Suriya [India]
6.	15:52.48	山ノ内 みなみ YAMANOUCHI Minami [Japan]

5. 総括

陸上競技において今大会のメダル獲得数は、金6、銀2、銅10、前回大会は金3、銀12、銅8であった（表4）。銀が減った要因としてアジアのレベルが上がったことだと考えられる。中

東だけではなくインドが日本を上回る結果を残し、ベトナムやタイ、韓国も力をつけてきてアジアレベルでも簡単には勝たせてもらえなくなった。

アジア大会は世界陸上選手権とは違い、レベルが格段に低い大会だと認識していたが必ずしもそうではなかった。男子 100 m で蘇柄添（中国）が 9 秒 92 で優勝し、山縣亮太（セイコー）は 10 秒 00 で 2 位と同タイム、自己記録ながら 3 位となり、ハイレベルなレースが見られた。男子 3,000 mSC では塩尻和也（順天堂大学）が前半から積極的に攻めの走りを展開し、ラスト 1 周で 2 人に抜かれたが最後まで粘り抜き、8

分 29 秒 42 のセカンドベストで 3 位となり、銅メダルを獲得した。塩尻の走りを見ていて大学生でも戦えるのだととても勇気をもらい清々しい気分となった。

金メダルを獲得した種目は、男子 200 m、男子マラソン、男子 4×100 mR、男子棒高跳、男子十種競技、男子 50 kmW とすべて男子であった。女子だけで見ると金 0、銀 1、銅 3 と合計 4 個で、金メダルを獲得できなかったのは 2 大会連続 4 回目でメダル 4 個は 1951 年のニューデリー大会から通じて最少であった。女子の場合、全体的にも言えるが特に短距離陣が

表 4 陸上競技 国・地域別メダル数

順位	国名	男子				女子				混成			男女			
		金	銀	銅	計	金	銀	銅	計	金	銀	銅	金	銀	銅	計
1	中国	5	5	5	15	7	7	4	18				12	12	9	33
2	バーレーン	2	3	3	8	9	3	4	16	1			12	6	7	25
3	インド	5	4		9	2	5	2	9		1		7	10	2	19
4	日本	6	1	7	14		1	3	4				6	2	10	18
5	カタール	4	2	1	7								4	2	1	7
6	イラン	2	1		3								2	1		3
7	ウズベキスタン		1	1	2	1	1		2				1	2	1	4
8	カザフスタン			1	1	1	1	3	5		1		1	1	5	7
9	韓国		1	1	2	1		2	3				1	1	3	5
9	ベトナム					1	1	3	5				1	1	3	5
11	キルギス					1	1		2				1	1		2
12	タイ		1	1	2		2		2					3	1	4
13	インドネシア		1	1	2		1		1					2	1	3
14	台湾		2		2									2		2
15	イラク		1		1									1		1
15	タジキスタン		1		1									1		1
17	サウジアラビア			1	1										1	1
17	シリア			1	1										1	1
17	クウェート			1	1										1	1
17	パキスタン			1	1										1	1
17	北朝鮮							1	1						1	1
17	香港							1	1						1	1

不甲斐ない結果に終わったため早急に強化していかねばならないだろう。

気になる点は男子 5,000 m, 10,000 m に選手が出場していなかったことだ。今大会出場していれば、2 種目とも銅メダルは獲得できた。競泳のように参加標準記録を設けてその記録に達しないと出場させないという方針はある意味理解できるが、選考会で順位とタイムをどちらも求めるやり方は長距離種目には適さないし、無理がある。勝負に徹すればタイムは狙えないし、タイムを狙えばペースメーカーとなって勝負に徹することができない。ケニアやエチオピアみたいに人材豊富だと誰を選んでもいいが、日本はそういうわけにはいかない。国際大会の経験がなく、いきなり五輪や世界選手権に出場しても結果を残すのはかなり難しいため、将来有望な若手選手にアジア大会で日本とは異なる環境で試合に出場させる経験を積ませ、大舞台でも力が発揮できるようなシステムを構築してもらいたい。

2 年後には東京五輪が開催され、1 年後の 2019 年 9 月 15 日にはマラソングランドチャンピオンシップ (MGC) が待ち構えている。そこで優勝すれば東京五輪マラソン代表に内定し、2 位、3 位のうち「MGC 派遣設定記録」を突破した最上位者が代表に内定する。「MGC 派遣設定記録」突破者がいない場合は 2 位の選手

が自動的に代表に内定することが決定している。早期に決定した 2 名は五輪に向け十分な準備期間を得ることができるため、地の利を活かし様々な対策を講じてメダル獲得の可能性を高めたい。私は国内外で長距離種目・マラソン・駅伝の解説をさせていただいているが、MGC・東京五輪を解説者として大会に関われるよう実績を積んでいきたい。MGC の放映は男子が TBS テレビ、女子は日本放送協会 (NHK) と確定している。

最後に、スポーツ経営学科発展のためご尽力された内海和雄氏に感謝の意を表する。

参 考 文 献

- Asian Games 2018 Jakarta Palembang. <https://en.asiangames2018.id/> (2018/9/20アクセス)
- TBS テレビ、「アジア大会2018ジャカルタ」<http://www.tbs.co.jp/asiangames/> (2018/9/20アクセス)
- 月刊陸上競技 (2018) 「月刊陸上競技10月号」. 講談社, pp. 53-81.
- 日本オリンピック委員会, 「第18回アジア競技大会 (2018/ ジャカルタ・パレンバン) 日本代表選手団」<https://www.joc.or.jp/games/asia/2018/> (2018/9/20アクセス)
- 日本放送協会, 「2018 ジャカルタ アジア大会」<https://www1.nhk.or.jp/sports2/2018asiangames/index.html> (2018/9/20アクセス)
- 日本陸上競技連盟, 「第18回アジア競技大会」<http://www.jaaf.or.jp/competition/detail/1274/> (2018/9/25アクセス)
- 陸上競技マガジン (2018) 「陸上競技マガジン10月号」. ベースボールマガジン社, pp. 8-21.